



部屋のノックの音でヘティスは目を覚ました。

ローズ

「おはようございます。起床のお時間です」

ヘティス

「あ、ローズたん、おは～」

(桃也(とうや)は、ここでは自由にしていとか言ってたけど、ちゃんと起床時間とかあるじゃなの・・・w)

ローズ

「お食事がご用意されております」

ヘティス

「あ、ありがと w 歯磨きと顔洗ってからね行くね w」

食事の間に案内されると、見たこともない煌びやかな食材を使い、宝石を見るかのような料理が用意されていた。豪華というか、神々の食卓と言っているようなものであった。

ヘティス

(料理からオーラが出てるわ。最近、オーラがよく見えるようになってきたけど、こんなにオーラが出ている料理を見たのははじめてね・・・)

そこへ桃也が威風堂々とオーラを放ちながらやってくる。

桃也

「昨日はゆっくりと休めたか？まあ、食事でもしてゆっくりとするがいい」

ヘティス

(この人も朝からオーラ全開ね w こんなにオーラを出しまくって疲れないのしから・・・w)

どの料理を食べても、少し口にするだけで脳内から神経伝達物質が溢れ出し、身体からオーラが湧き上がる気がした。神話の中では「黄泉戸喫(よもつへぐい)」というものがある。あの世で食物を食べると、元の世界へ帰って来れなくなる、というものである。まるで、天界で、そうしたものを食べているかのようであった。

ヘティス

(悔しいけど、とても美味しいわ・・・。そして、なんかもう中毒になりそうで、これを食べ続けたら元の世界に帰れなくなりそう。とりあえず自制心を常に持って、腹八分目にしておかなきゃ、これではどんどんと相手のペースになっちゃうわ・・・)

桃也も席につき、ヘティスと一緒に食事をし出す。

桃也

「ヘティス、他に何か望みはないのか？余が何でも叶えてやるぞ」

ヘティス



(聖盾が欲しいに決まってるじゃないの。けど、それは今は置いといて。物事はプロセス
ってのがあって、急いではダメよ、ヘティス。未来への分岐点は何なのかを感じない
と！)

「そうね〜」

少しヘティスは考えた。

ヘティス

「アナタから貰ってばかりではいけないわ。私からもしてあげられることがあるわ」

桃也

「ほお、皇帝である余に何をしてくれると言うのだ？」

ヘティス

「・・・ヒーリングよ！」

桃也

「ヒーリングだと？」

ヘティス

「アナタはサトゥルヌスと戦って、多くの魔力・神聖力を使ったわ。それがまだ回復して
いないと思うの」

桃也

「・・・なるほど」

「それにしても其方は色々なことを知っているようだが何者だ」

ヘティス

「私はグリーン・ハーティストよ！」

桃也は幼なじみの恋人を妃（きさき）として来たが、桃也がサトゥルヌスを倒した後に彼
女は病死した。そこから意気消沈した桃也を気遣い、側近たちが王宮に美女の間を作るよ
うになると、今度は桃也が変わってしまい、政務も疎かとなっていった。それは彼女を亡
くした寂しさから来る心の空虚感であり、美女を侍らすのは、その代償行為であった。

しかし、ヘティスは思った。桃也が蓮也の前世の姿なら、それくらいでは自分を見失うこ
とはないのではないかと。その自分を見失った理由に、サトゥルヌスと戦った時に必要と
した精神エネルギーが枯渇したままであり、そこに彼女の喪失が重なってしまったのでは
ないか、という仮説を立てたのである。

桃也

「・・・ふむ」

「よかろう、食事が終わったら“桃源郷の間”へ来るが良い」

ヘティス

「わかったわ」

食事を済ませ、少し休憩し、ローズに案内してもらい桃源郷の間へとヘティスは向かった。

ヘティス

「ローズさんは、あの桃也さんのことが好きなんでしょ？」

ローズ



「陛下に向かって好きだなんて・・・、しかも、私なんか・・・」

ヘティス

「昨日も言ったけど、恋に身分は関係ないし、“私なんか”も禁止って言ったでしょw」

ローズ

「あ、はい・・・」

ヘティス

「私の育った国では、恋に身分なんて関係ないのよ。相手の気持ちももちろんあるけど、その人のことが好きなら“好き”って言う権利は誰もがああるわ」

ローズ

「そうなんですか！？ヘティスさんの国は素晴らしいですね！」

ヘティス

（そうね、気づかなかったけど、私たちってとても幸せなのね・・・）

「だからいつか、ローズたんも想いを伝えれるといいわね」

ローズ

「はい・・・、けど可能性は殆どないと思います」

ヘティス

「希望を持って。希望はほんのわずかでいいの」

「アナタがここにいるってだけで既にニダーナ（因縁）は発生してるのよ」

ローズ

「希望・・・」

ヘティス

「そうよ、希望よ」

そう言いながらもヘティスは自分も同じく、彼に気持ちを伝えていないと思った。そして、いつか、それを伝えようと、この時、思うのであった。

桃源郷の間に入ると、いつもの通り、美女に囲まれ、ソファに座っている桃也の姿があった。

桃也

「さあ、いつでもヒーリングをはじめるがよい」

ヘティス

「わかったわ、それじゃ、そのままソファに座ってて。周囲の人は少し距離をとってほしいの」

桃也の合図で美女たちは、桃也との間隔を空ける。ヘティスは桃也の近くに寄り、跪（ひざまず）き、ヒーリングを開始する。既にエネルギーキャンは昨日の時点で終わっており、狙うは空虚感を醸し出しているハートチャクラである。周囲の美女たちは、桃也に近寄るヘティスに嫉妬の目を向けるが、ヒーリング状態に入っているヘティスは、その視線を物ともしない。

ヘティス



(ハートが硬く冷えてて、とても悲しい感じがする……。そしてエネルギーが枯渇していて、なんかブラックホールみたいに、底無しに私のエネルギーが吸い取られていく……)

ヘティスは、何度も強烈な目眩（めまい）に襲われつつ、桃也へのヒーリングを続けた。

ヘティス

(もう少しよ……。ヒーリングが終了した時、ニダーナ（因縁）が動き出し、真の癒しが始まる。エスメラルダ先生、ネコ師匠、どうか私に力をお貸し下さい……！)

桃也

(この者は本気で命を削って余にヒーリングをしようとしている……。一体、何がそこまでこの者にさせるというのだ……)

桃也は、そのヘティスのエネルギーの暖かさを感じていた。それは久しぶりの安寧の一時であった。そして、桃也はヘティスの肩に手を触れる。

桃也

「もう、よい。余は十分に満足した。これ以上は其方の身体に危険が及ぶ」

ヘティス

「ま、まだよ……。まだ、ヒーリングは終わってないの……」

ドン！

突然、扉が勢いよく開く。

將軍と思われる人間と、何名かの兵士が入って来た。

「陛下、貴方は国政を蔑（ないがし）ろにし、国を疲弊させ、民を苦しめている。よって、我らがこの場にて天誅致す！」

ヘティス

(こ、これは、もしかしてクーデター？)

(この女性たち全員をプロテクションしなきゃ危険だわ……)

(さっきので神聖力の殆どを使っちゃった……。どうしよう……)

ヘティスはエネルギーを使いすぎて立ち上がることもさへ困難であった。

周囲の美女たちは、声を上げようとするもの、自分の身を守ろうとするもの、逃げようとするもの、戸惑う者、様々であった。そこへ、突然、メイドのローズが桃也と兵士たちとの間に立ちはだかる。そしてローズは兵士たちを精一杯睨みつけ、声を張り上げ、気丈に振舞う。

ローズ

「ここは男子禁制の場であり、しかも、皇帝陛下の御前です。すぐに持っている武器を捨て、そこへお控えなさい！」

ヘティス

(ロズたん……)



ヘティスが先ほどまで見ていたローズとは違い、凄まじい気迫に満ちていた。兵士たちは、この意外な行動に一瞬たじろいだが、構わず矢を射掛けようとする。そこへ桃也が入り身にて高速で抜刀し、射掛けられた全ての矢を切り落とした。そして、一瞬で兵士を薙ぎ倒し、将軍を捕らえた。腐ってもロータジア最強にて「超新星」と言われた実力は今も健在であった。

ヘティス
(す、凄い・・・)

桃也の剣は諸刃の剣も用いており、片方を刀引き（かたなびき）にして潰してあるため、全て峰打ち状態であった。

桃也
「誰かある！この者たちを引っ立てい！」

倒れた兵士を、衛兵たちが取り押さえ連行していく。そこへ李統風が駆けつける。

李統風
「申し訳ございません。私がいながら、このような失態……。この者たちを重罪に処します故……」

桃也
「まあ、よい。それと、この者たちは私が後で直々に裁く」

李統風
「ははっ！」

ローズは緊張の糸が切れ、その場にへたり込む。それを見たヘティスがローズに駆け寄る。ローズは危険を顧みず、自分の身を呈して桃也を守ろうとした。そこにヘティスは衝撃を覚えた。

女性は男性に守られる、という常識ではなく、女性も男性を守るのだという何かであり、お互いが守り合うという何かである。

ヘティスは思った。
自分なら、桃也の方が戦闘レベルが遥かに上のため、そのような非合理的な行動は取らないであろう、と。
このローズの行動は、皇帝の身を配下を守ろうとするのではなく、ローズの桃也への想いの強さなのであろう、ともヘティスは思った。そうした意味で、このローズが放つ愛情の強さに対しては、自分は遠く及ばない、とヘティスは思うのであった。

ヒーリングを行えばニダーナ（因縁）が動き出す。これは師からの教えであるが、ヘティスは最初、兵士が飛び込んで来たため、ヒーリングは失敗に終わったと思った。しかし、このローズの果敢な行動こそが、このヒーリングの兆しではないか、と思うのであった。

『恋愛論』の著者・スタンダールはこのように述べている。



「希望はほんの少しでよい」

と。

スタンダードは更に言う。

「果敢で、むこう見ずで、激しい性格と、人生の不幸に遇って発達した想像力があれば、希望はさらに少なくてもよい。」

このローズの命懸けの行動、果敢で、むこう見ずの行動が、何かを動かすのかどうかは、この時点では、まだわからなかった。しかし、何か動き出そうとしているのであった。

【解説】

生物は通常、自分よりも大きな外敵、強い外敵には立ち向かっていかない。しかし、ローズは立ち向かって行った。これは母性行動の場合、見られる現象である。ここにはオキシトシンという愛情に関係したホルモンも関係する。

孟子の概念に「万物一体の仁」というものがある。これは、例えば川で溺れた子供がいた場合、人は反射的に助けるものである、という性善説のものである。

ここでのローズの行動は、母性行動であったり、性善説の仁の働きであったり、そのような根源的な愛情として表現してみた。若い男女の恋愛感情ではなく、もっと根源的な守る、守り合う愛情を描くことで、傷ついた桃也の心が何らかの反応を起こし、物語が動いていくのではないかと著者は思うのである。

また、この男女がお互いを守り合う関係については、今後の物語のテーマの一つにもなってくる、と今のところ考えている。